

小説●ハヤカワウカ

イラスト●Zukky



淫紋魔法姫

マキナの  
ビッチな冒険

*Bitchful Adventure of Magical Princess Makina*

試し読み版



BEGINNING NOVELS

# 淫紋魔法姫 マキナの ビッチな冒険

*Bitchful Adventure of Magical Princess Makina*

マキナ・グランデル

テット・クロム

## Contents

プロローグ	005
1章 ◎ 始まりの宿屋	012
Another End 1 ◎ 30歳差の宿屋の花嫁	043
2章 ◎ 火と水の町ウェルズ	051
Another End 2 ◎ 温泉宿のハーレムヒロイン	121
3章 ◎ ウェルズ火山の採掘場	132
Another End 3 ◎ 炭鉱娼婦	170
4章 ◎ バニランダの酒場	177
Another End 4 ◎ ウサ・ビッチ・バニー	215
5章 ◎ 食事処・猫の首輪亭	221
Another End 5 ◎ 食事処の淫乱ウェイトレス	251
6章 ◎ 巨大樹の森と勇者の力	257
Another End 6 ◎ 勇者の子を孕むハーレムちよろイン達	307
7章 ◎ 禁書庫とヨセフの書	325
Another End 7 ◎ 禁書庫の中の浮気女達	380
書き下ろし ◎ 魔法姫と黒騎士の夜	390



## プロローグ

「姫様は見かけによらず、奔放な部分もありますなあ」

招待客の中の一人が呟いた言葉に、姫君は苦笑いを浮かべつつ『紫色の氷』を拾い上げた。

なんのことはない。グランデル王国樹立六〇〇周年を祝うこの式典（バリエーション）の場で、給仕が誤って零した葡萄酒（ワイン）を、魔法で凍らせただけだ。

危うく白いドレスや長い金髪、近くにいた大臣や貴族達の服も汚れそうな場面だったので、そうしたに過ぎない。

しかし王族が魔法を扱うことを『奔放』と思われてしまふのは、少し心外だった。同時に致し方ないとも思った。

ここは、武器も魔法も扱う必要がない上流階級だけが集まる会場なのだから。

「姫君ですのに魔法の才覚にも溢れているとは珍しい」  
「そうとも限りませんぞ。グランデルの始祖は魔法剣士だったのですから」

「我らが姫様の技量は学園の中等科を卒業し、高等科にも楽々進めるレベルです。その者達と年齢も同じですし」

「そういえば今日は姫様のお誕生日でもありましたな」

「ワタクシから見ても、年々お美しくなられていますわ」

高名な貴婦人の言葉をお世辞だと思つて、姫君は肯定も否定もせず、角が立たないよう小さく頭を下げるだけ。

しかし実際、彼女の評価は正しかった。誰も彼もが王女の長い金髪に見惚れ、整った顔立ちに美しさを見出し、そして豊かな肢体へ常に視線を注ぎ続けていた。そんな下劣な感情を、あからさまに表に出す者は皆無だったが。

「お誕生日おめでとうございます、姫様」

「零れたワインを瞬時に凍らせた腕前、お見事でした」

「麗しさだけでなく魔法の才もおありとは、やはり伝説のアーサー公の血筋でしょうな」

上等なスーツやドレス、煌びやかな装飾品や化粧で飾り立てた人々が、笑顔で語りかけてくる。

その一つ一つに丁寧な礼を述べたり謙遜したりと、不快ではないが疲れる作業を繰り返した。

「ですが魔法ばかりに没頭していますと、将来ご婚約なされる時に適切なタイミングを逃すやも……」

「おやおや、そのような発言は不敬ですぞ」

「そうですわ。それにこれほどお美しい姫様ならば、引く手数多でしょうし……」

「おや？ 姫様？」

口々に勝手なことを言う貴族の客達に、小さく会釈してからその場を足早に離れた。

そして広いパーティー会場を真つ直ぐ進み、バルコニーへ出て冬の冷たい夜風を浴びる。

寒さをものもしない民草の、祭りの喧騒が城下から聞こえてくる。だが先程までとは比較にならないほど、静かで落ち着く場所に思えた。

「……ふう」

「——マキナ様は他国の王子や貴族に嫁ぐよりは、いつそ魔法と添い遂げる方が幸せなのでは？」

背後から聞こえてきた若い声に、ドレスのフリルを揺らして振り返る。

そこにいた黒髪の騎士に、精悍な顔付きの同年代の青年に、ワザと頬をむくらせて怒った表情を見せてみる。

「もおつ。テットさんまで。確かに魔法は好きですけど、誰とも結婚しないだなんて言った覚えはありません」

「はは、申し訳ありません。姫様」

若い騎士——『テット』は、主君が本気で怒っていないのを承知の上で自分も親し気に、軽く頭を下げて謝罪した。「いつか姫様にそのような時が訪れても、その後も、ずっとずつと俺は姫様をお守り致しますよ」

「……はい。お願いしますね、テットさん」

二人でバルコニーの端に立つて。眼下に広がる街の灯りや、祭りを楽しむ人々の笑顔を見つめつつ、約束を交わす。グランデル王国の樹立六〇〇周年を、城内も城下でも盛大に祝っている。活気に溢れる人々の営みを見下ろしながら、幼馴染の騎士へとサファイア色の瞳を向けた。

「……結婚……ですか……」

「はい？ なにか仰いましたか？」

「い、いえ！ なんでも、ありません……」

黒い瞳とがち合って、慌てて視線を逸らす。昔から彼に抱いている淡い感情を悟られないよう。陶器のような白い肌が、顔が仄かに赤く染まるのを見られないように。

しかし、頼りになるが鈍感な幼馴染は、しつこく聞いてくる。「大丈夫ですか」「熱でもあるのですか」と。女中や町娘達にも人気なその顔が、迫ってくる。

言い訳も誤魔化しも難しく、どうしたものかと困っていると——。

「おお、マキナ。こんな所にいたか。それにテットも」

「お父様」

「国王陛下！」

バルコニーに入ってきた金髪金目の威厳の溢れる男に、

テットは片膝を付いて平伏する。

「ああ、跪ひざまずかなくて構わんテット。今日はお祭りなのだから、そう畏かしまるな」

最高級の白いスーツと、その上に赤いマントを羽織ってマキナの父であり、テットの直属の主にして、そしてグラデルの国王が。この国の元首が、二人の前に現れた。

「お父様も避難してきたのですか？」

「せっかくの式典なのに、祝う暇もなく社交辞令や外交の話ばかりだからな。大事なことではあるが、六〇〇年も国が続くと縁戚や来賓が膨大になるから、考え物だなあ」

そう言つてグラデル王は娘と同じ金色の髪を掻く。

ぼやいてはいるが、誰よりも今日という日を待ち望んだのは日本人であると、マキナは知っている。そして無事に建国記念日の今日を迎えられたのも、父の功績であると。

四十代前半という、権力者としては若い部類でありながら、既に歴代上位の賢王とも呼ばれている。彼の采配がなければ、建国記念日を迎える前に新興の軍事国家に侵略されていたかもしれない。

国の危機を跳ね退けた父は、臣下や民からの信頼も厚い。

「それだけ皆様が、お父様やこの国を慕っているということだとだと思います」

「正直俺は、娘に嫌われなければそれで良いのだがな」

「勿論もちろん私もお父様が大好きです！」

「ふふん、だとさテット。最愛の我が娘はパパ大好き子なのだ。まだお前にはやらんぞ」

茶化すような台詞に、マキナもテットも頬を染める。

「お、お父様！」

「いえ、俺などは……！ そんな、恐れ多い……！」

「冗談に決まっているだろう。まあ、マキナが欲しかったら騎士団長くらいにはなつてもらわんとな」

背筋を伸ばして立つテットの肩に王は腕を回し、小突きながらも期待した言葉を贈る。彼にとつては、テットも自分の息子のように思える存在だった。

「……どのような立場になろうと、陛下に拾っていただいたこの命、亡き母の分までグラデルに捧げます……！」

対するテットは生真面目に、強い忠誠心を覗かせる。

グラデル王は満足そうに「頼りにしてるぞ」と肩を叩き、『母』という単語を聞いて本来の用件を思い出した。

「……と、そうだマキナ。母さんと呼んできてくれ。そろ

そろ国王夫妻で挨拶しなければならぬ時間だというのに、まだお色直しから戻っていないんだ。準備に手間をかける性格ではなかつたはずだが……実の娘から急かさされれば、

すぐに来てくれるだろう」

「はい、分かりました」

「では俺も……」

マキナの身の安全を守る騎士としてテットは同行しようとしたが、王はテットにも伝言があつた。

「いや、騎士団長がお前テットを探していた。何やら城内で怪しい人影を見たとの報告が入つたらしい。念のため、お前も警備に回つてくれ」

「はっ！ かしこまりました！」

「ではお父様。また後ほど」

そうしてマキナとテットは王に頭を下げ、それぞれの目的のためにバルコニーから城内へと戻つた。

——それが、二人にとつてグランデル王との、最後の会話になつた。

\*\*\*

鎧兜と二本の剣を装備し、丘の上に勇ましく立つ初代国王。廊下に飾られたその大きな肖像画を通り過ぎ、パーティー会場から父と母の私室へと向かう。

「……？」

しかし『違和感』を覚えた。街や城内は建国記念日で賑わっているのに、不自然なまでに廊下は静かだつた。誰の声も聞こえない。誰とも通りすがらない。

母の警護をする騎士。身の回りの世話をするメイド。王族の周囲には常に、誰かしらが付き従っているものだ。

「……お母様？」

なのに。まるで喪に服しているかのような静けさに、胸のざわめきを覚えつつ、父と母の寢室へ向かうと——。

「……ん……あ……」

「え……？」

部屋の方から、なにか音が聞こえてきた。水面に落ちる滴のような。春先に『つがい』を探す、猫のような声が。

ざわめきは、心臓の鼓動となつて早まる。呼吸が浅くなり、思考がぐるぐると混乱してくる。

そんな中で恐る恐る、忍び足で半開きの扉に向かう。そうして、ドアの隙間から父と母の寢室を覗くと——。

「——あつ♥ ああつ♥ あなたあ♥ ごめ、ごめんなひやっ……♥ いっ♥ イイっ♥ キモチいいのおっ♥」

「ッ……!!」

下半身を露出した母が、男に組み伏せられていた。亜麻色の長い髪を振り乱して。自分と同じサファイア色

の瞳に涙を浮かべて。父ではない誰かと交わっている。

「んっ♥ ひあっ♥ そこっ♥ んひいっ♥ ああ♥」

ムッチリと脂肪の乗った太ももや、白い肌の尻に打ち付けられる、男の浅黒い腰。犬や猫の交尾のように背後から、激しく腰を振って性器同士を擦り合わせている。

粘膜接触によって、ぐちゅぐちよと卑猥な音が聞こえてくる。濡れた王女の膣内が、ガチガチの硬い男根に抉られている証拠だが、マキナにはそれが理解できなかった。

「なっ……!」

黒いフードとローブで男の上半身や顔は見えない。見えるのは、見たこともない母の淫靡な顔だけ。涙を流し口の端から涎を垂らし、夫ではない別の男に身体を許している。「ああっ♥ 来てる♥ だめえ♥ 奥っ♥ 感じたことないところで、来ちゃってるう♥ ああんっ♥ ああーっ♥」

あられもない言葉を大声で放ちながら、シートを握って快楽に耐えている。しかし突き上がった大きな尻を男に掴まれ、母性の象徴である二つの乳房を激しく揺らされるほど肉棒で膣内を小突かれれば、母はたまたまらず嬌声を上げた。「そ、そんな……」

自分の思考も呼吸も、心臓すらも止まったかと思つた。恐怖と驚愕とで、金縛りのように身動きできない。

「あっ♥ イクっ♥ イゲう♥ やらあ♥ あなたっ♥

ごっ、おお♥ ごめん、なさっ……! ああああっ♥」

やがて見知らぬ男は腰を一層深く押し込み、小刻みに震えて『果てた』。母は、グランデル王妃もまた仰け反って甲高い嬌声を上げ、その後ぐったりとベッドに伏した。

「お、お母さ……!」

「……?」

「っ!」

黒いフードの男が、ゆっくりと振り返つた。

頬に刻まれた横一文字の傷。それを認識した直後、弾かれるようにその場から逃げ出した。靴が脱げても気にせず、脇目も振らず、必死に、全力で寢室から離れた。

(なにが……どうして……!?)

パニックになつた頭では、疑問が浮いてはまた次々現れるだけ。あれは誰だ。どうして母が。騎士やメイドは。父に知らせなければ。でもどうやって? なんと言えば良い。そもそも、今見た光景は現実なのかすらも……。

「……テットさん……!」

幼馴染の名前を呟く。会いたい。いつもと変わらぬ表情と声で、自分に微笑みかけて欲しい。

父とテットに会うため、息を切らしてパーティー会場に

戻ると――。

「……え？」

会場には、誰もいなかった。母の周囲に従者がいなかったため、ここでもそうなのかと一瞬考えて恐ろしくなった。しかし実際は違った。ほとんどの来賓客達は、バルコニーに出て外を――夜空を見上げていた。

「あれ」はなにかの余興ですか？

「あんな大きな魔法陣を宙に出現させるとは……！」

「見事ですなあ。で、彼はどこの部隊の所属ですかグランデル王？」

「魔法師団の団長は女性だったはずですが……」

「……いや。何も聞いていない。あの男を見たことも……」

城内の人間も。城下の民草達も。今この瞬間、全ての国民が夜空を見上げている。そこに浮かぶ、巨大な魔法陣と黒いフードを被った男を。

その男は、ついさっき。たった今まで、寝室で母を犯していた侵入者だった。

――あの魔法陣は余興ではない。『攻撃』だ。

それを父や、人々に伝えようとマキナは走り出した。

「お父様……ッ！」

その瞬間。

『ゲル――』

黒いフードの男がそう咬いた瞬間。魔法陣は光り輝き、それを見ていた者達全員の額に、同じ紋様を刻み付けた。

そしてグランデル国民達の肉体は――足元から、氷のような結晶へと変化していく。

「なっ!!」

「なんだ!!」

「身体が……!!」

「あ、ああ……っ!!」

「なにが起きている!!」

「助け……!!」

困惑と混乱。悲鳴と怒号。建国記念日を祝っていた人々の笑顔は、笑い声は、一瞬にて地獄で呻く亡者達のそれに変わってしまった。

やがて人々の全身は、細長い結晶へと完全に変化してしまつた。そして結晶は宙に浮かび上がり、黒いフードを被つた謎の魔法使いのもとへ集う。

「お父様！ お母様……!! 皆……!!」

結晶に閉じ込められ、眠りにつく国王。そして王妃。それだけではない。騎士団長と魔術師団長、大臣もメイドもシェフも庭師も貴族も町人も老若男女、ペットや家畜すら



も。この国に住まう全ての『生命』が、マキナの目の前でクリスタルに閉じ込められてしまった。

「——姫様ッ！」

涙を流し、腰が抜けてへたり込む背中に、幼馴染の声が飛び込んできた。

「テットさ……!!」

『全て』ではなかった。テットだけが無事だったようだ。他にも無事な者がいるかもしれない。

そう安堵しかけた時——。

「姫様！ お逃げください……!!」

『なにか』が、テットの額と自分の下腹部を貫いた。矢のような、魔法のように速い『なにか』だった。

自分もテットもバルコニーに倒れ、意識を失いそうになる。しかし腹痛よりも激しく熱い『疼き』に、下腹部を押さえて悶絶する。

「テット、さ……」

「ひめ、さま……!!」

横で倒れる幼馴染に手を伸ばそうとして。人々を結晶に変えた魔法陣の紋様がテットの額にも浮かび上がり——それが消滅するのを見届けてから、子宮の辺りを襲う激痛に耐えきれず、臉を閉じた。

その日。六〇〇年の歴史と伝統を誇るグランデル王国は、消失した。

姫君と騎士だけを残り、全ての国民は、一夜にして結晶に変えられ姿を消した。

## 1章 始まりの宿屋

——そして清純な王女であろうとしたはずの私が、いかにして淫奔なる日々へと墮落していったのか——

\*\*\*\*\*

初夏の風が平原を駆け抜ける。

それに乗って響く音。それは剣と剣のぶつかり合い。互いの命を懸けた、激しい戦いの音色であった。

「ギンチャアッ！」

醜い顔をした『ゴ布林』が、最後の力で剣を振り上げる。緑色の体表は赤い鮮血にまみれ、足取りも覚束ない。

それに対して少しばかりの哀れみと、同時に生殺与奪の権利を自らのものとした覚悟を黒い瞳に宿し、冒険者の少年——剣士『テット』は漆黒のマントと髪を風になびかせ、

一太刀でゴブリンの首を刎ねた。これで魔物の群れは全滅。

返り血も刃こぼれもなく。断末魔すら上げさせない鋭い一撃は、十代としては比類なき技量だった。

そして同時に、必要以上の苦しみを与えない慈悲の剣で

もあつた。

だからこそだろうか。ともすれば『甘さ』と取れるその戦い方。そこが狙われやすいのは。

既に倒した——とテットが思っていた、地に伏すゴ布林。その魔物は首を刎ねられた仲間達の仇を討つため、死んだフリをし、テットの背中をクロスボウで狙っていた。今なら殺せる。既に自分は瀕死の身であるが、道連れにはできる。甲冑ではない冒険者の軽装なら、矢で穿てる。ゴ布林がそう確信した瞬間——。

「——フローズランクス」

緑色の胴体を、太い氷の槍が貫いた。

「グギンチャアッ！」

そして矢は放たれず。背に風穴を開けられたのはテットではなく、ゴ布林の方であった。

「……ありがとうございます。助かりました、姫様」

背後で息絶えた魔物を見て、自分が隙を見せていたことと、それを『仲間』に助けられたことを認識した。

「いえ。どういたしまして」

ウェーブがかつた金色の長い金髪。その上に三角の魔女帽を被り、魔法杖を持った少女——『マキナ』が歩み寄る。かつてのドレスは今はなく。動きやすいミニスカートか

らは、滑らかでいてムッチリした太ももを覗かせている。

「姫様をお守りするはずが、助けられてばかりで……」

「……あのですねテットさん」

「はい？」

「その『姫様』と呼ぶのはヤメてくださいと、いつも言っていますよね？」

「あつ……。も、申し訳ありません！」

「今の私達は姫と騎士でなく、冒険者のマキナとテットです。無闇に注目を集めるような言動は、するべきじゃないと思います」

「配慮が足りず、お詫びの言葉もありません……！ グラन्दール王国の騎士として、この上は誇りと魂の証である愛剣を叩き折って謝罪を……！」

「もーっ！ そこまで求めてません！」

腕は良いのに融通が利かず、どこか視野の狭い騎士テット。だがそんな彼が、マキナに残された唯一の臣下だった。

「私の言うことが分かって貰えたなら充分です。それより、どこか怪我はしていませんか？ 負傷しているところがあれば、すぐに治療魔法を……」

「も、問題ありません！ 姫さ……マ、マキナの手を煩わせる事態にはなりません。させません！」

五匹のゴブリンの群れに囲まれ、乱戦状態だったというのに、言葉通りテットは無傷であった。

味方<sup>マキナ</sup>の援護もあつたとはいえ、改めてその強さと、そして『仕事<sup>ウエス</sup>の終わり』を実感する。

丁度その時。

戦闘が終わったことを告げるかのように、強い風が吹く。その風に自前の魔女帽が飛ばされないよう、マキナは三角帽子を手で押さえつつテットに微笑んだ。

陽の光に反射して輝く金色の髪や、フリルの付いたスカートが風に揺れ、一つの幻想的な絵画を生み出していた。

「……妖精みたいだ」

「はい？ テットさん、なにか言いました？」

「……い、いえ。とにかくこれでクエストクリアです。『ゴブリンストーン』を回収して、今日はもう宿に戻りましょう」

「明日はいつもより早い出発ですものね」

誰に対しても——部下である一介の騎士にも丁寧で、礼儀正しく接してくれる。

そして朗らかで優しいながら、戦闘では充分頼りになる。冒険者としてこんなにも素晴らしい仲間、そして騎士として身を懸けることのできる主君は、ギルドで探した

つて出逢えるはずがない。

自分は本当に恵まれた人間だと、テットは幸福な気持ちに包まれていた。

「なら今夜はご馳走ですね！ 酒も注文しましよるか！」

「もー、テットさんったら……。お酒弱いじゃないですか。

……でも今日だけ、特別ですよ」

「よっし！」

「ふふふ」

だがこの時。

テットというまだ若い少年剣士は、知らなかった。知る由もなかった。

この穏やかな時間は、既に壊れた『幸福』であったという

\*\*\*

——全てが始まったあの日から、とうに全ては終わって

\*\*\*

故郷グランデル王国を離れ、隣国の『ブリタニカ』領内に冒険者として活動する二人。

マキナとテットが滞在する、ブリタニカ王国边境の町に、今日も日が沈んでいく。

だがまだ夕方だというのに、宿屋兼酒場であるその店は、男達の喧騒で満ちていた。

「ただいませす、店長」

「ただいま戻りました」

テットとマキナの二人がカウンターに近付き、挨拶と共に皮袋を置く。その中身は、今日の宿代と食事代だった。

「おー！ おかえり二人とも。無事で何よりだあ！」

新聞から目を上げた太り気味の中年男——宿屋の店主は、二人の帰還に声を上げて喜んだ。温厚そうではあるが頭頂部の毛髪も存在感も薄く、覇気に欠けたオヤジという印象の男だった。

「またズイブン稼いだなあ。流石は天才剣士！」

「いやいや、やめてください。魔物の体内から取り出したゴプリンストーンが偶然大きいもので、それをギルドが高値で買い取ってくれただけです」

「それにしたって、この町に来てから結局一度もクエスト失敗しなかったじゃないか！ 凄いいんさあ」



「無茶な依頼は受けません。それに姫さ……マキナの助けもありますし」

「いえ！ 私なんて、そんな……！」

急に話題に上り、主君は驚いたように恐縮する。

しかし実際、今日の戦いもマキナがいなければ手傷を負っていた。今日だけではない。これまで何度もテットは窮地を救われてきた。

「良いねえ！テット君。強くて可愛くて、何より胸の大きな仲間がいてさあ！俺もできれば、マキナちゃんみたいな美少女にウチのウエイトレスを……って、あだあ!？」

そこへ。スパーン！と、店主の薄くなり始めた頭頂部がひっぱたかれた。

円形に脱毛してしまっている頭を擦りながら、店主はゴブリンより怖いものを見るような目でそちらを向く。

「い、痛いじゃないかアマンダ……」

そこでは吊り目の女従業員が、目に見えるほどの怒りのオーラを放ちながら立っていた。

「痛いじゃないか、じゃないよ！このハゲデブ店主！いつまで長話してんだい！マキナちゃんも困ってるじゃないか！」

ベテラン従業員に叱責され、店主の太った身体が一回り

小さくなったように見える。

その一連の様子に、テーブルを囲む男達からは盛大に笑いが起きた。

「相変わらずアマンダおつかねー！」

「でも店長の言い分が正論だよな。可愛い子が正義だぜ」

「そうそう。だからさあ、マキナちゃん！コッチ来てお酌してくれよお！」

「マキナちゃんがウエイトレスだったらな。男より怖いアマンダと飲むよか、よっぽど酒が美味くなるのによ」

「バックおめー。テットより剣の腕も顔も悪いくせして、身の程知らずだつての！」

「くっそー！」

そうしてまた、店には笑いの輪が広がる。

数週間の滞在でこの店主や従業員、常連客ともすつかり意気投合したテット達。

だが彼らは知らない。マキナとテットが、一夜にして消失したグランデル王国の生き残りだということを。目立た

ないよう姫と騎士という身分を隠し、仇敵である『黒いフードの魔法使い』を見つけて国民達を救うために、冒険者として旅をしていることも。

この町に立ち寄ったのは、ギルドから発令されるクエス

トを攻略し、今後の旅の資金を貯めるため。

しかし路銀稼ぎの間に、この店の従業員や常連客と打ち解けた。正体を偽っている後ろめたさはあつたが、それを忘れさせてくれるほどに楽しい日々だった。

そんな彼らと明日別れるのも寂しいが、自分達は旅人の身。いつまでも同じ所には留まっていられない。

——命に代えてでも、果たしたい使命があるのだから。マキナと共に笑いつつ、テットはそう思っていた。

しかし。この時マキナは、全く別の感情を抱いていた。

(ああ……今日もまた……。『来て』しまいました……)

微かに目が潤む。そして全身で知覚する。

和やかな店の雰囲気に乗くう、獐猛な獣達の感情を。

魔女帽を乗せた自分の金髪も、小さな顔も、滑らかな肌も、ふつくらとした唇も。

見られている。

ディアンドル衣装から覗く鎖骨。歩く度に僅かに揺れる、歳不相応に大きな乳房。

収容しきれなかったバスの上部分が谷間を作り、男達の視線を吸い込むように集めている。

くびれも、腰のラインも、フリルの付いたスカートも、スカートと白いハイソックスの合間に見える太ももすら。

全身が色香を放ち、この町に滞在している間、ずっと欲望に満ちた目で見られていたことを知っていた。

同時に自分が、それに羞恥と快楽を感じていることも。感じてしまう時間が、必ず来ることを。全て知っていた。

知らないのは、隣で常連達と陽気に笑い合うテットだけだった。

そうして夜になって別れの宴会が始まっても、人知れず下腹部を手で押さえ続けていた。

\*\*\*\*\*

——そして私は、抗えない裏切りに身を染める——

\*\*\*\*\*

月明かりが照らす静かな部屋に、淫靡な音が微かに響く。  
「……っ……はあ、……んっ……」

半開きの口から、湿り気と熱を帯びた吐息が漏れる。

『こんなこと』をするようになったのは約半年前、祖国

であるグランデル王国が一夜にして『消失』した時からだ。それまでは自分で自分を慰めるどころか、性器に指を這わせたことすらなかったというのに。

「あ………いつ………」

それが今は。

冒険者達が利用する格安な宿で。隣のベッドでは、酔い潰れた臣下<sup>テ</sup>が寝息を立てているというのに。

ワンピースのような薄い寝間着<sup>ネグリジェ</sup>のスカート部を捲り上げ、淡いピンク色の下着に染みを作り、シーツが濡れるほどの愛液を流している。

そして右手は自分の意思で、肉壺をかき回して卑猥な水音を響かせる。

「く………ふあ………っ」

全てはあの『魔法使い』のせい。

父も母も、家臣や領民も、鳥獣に至るまで全ての生命を一夜にして奪ったあの男。

あまつさえ彼は、穢れを知らなかった王女の下腹部に——臍部の下、丁度子宮の上に当たる場所に『紋』を刻み付けた。

そのせいで毎晩のように、この熱に浮かされる。心臓の鼓動が早まり、呼吸が乱れてしまう。

「あん………や………っ」

それでも止まらない。秘部をかき分け、奥へと進ませ。細かに指を動かす度に、思い起こすのは鮮烈な過去。

——両親の寝室でまぐわう二匹の獣。

貞淑な妻であり偉大なる母でもあった王妃を組み敷く、黒いローブ姿の男。

玉のような白い肌に打ち付けられる、浅黒い下半身。

一度だっつて見たことも、想像すらできなかった母の淫靡な表情と嬌声。

そしてそれにトレースされる——もしも自分があそこで犯されていたら、という忌むべき空想。

「はっ………あ………」

止められない。

宿屋の店主が向けるねっとりとした視線に。酒を飲む常連客達の発する、荒々しい生氣——精気に。

もしもあの手が自分の身体に伸びてきたら。もしもあの人達に乱暴されたら。

それを想う度に身体の奥底から込み上げてくる激流に、一際大きい波に——身を任せて達する。

「あああ………っ！」

パチパチとなにかが焼き切れるような、あるいは脳裏で



光が弾けるような。そんな感覚と共に腰が一瞬ガクガクと跳ね上がり、そしてぐったりと全身の力が抜ける。

「……ふーっ……。ふー……。う」

汗と涎と股からの水分が、薄手のネグリジェを少しだけ重くする。魔物と戦う以上に体力を浪費するとすら思えた。

——それでも、足りない。

自分のこの細い指では、いくら押し込もうと動かそうと、いまいち盛り上がりきれていないと感じていた。もつと奥へ、もつと激しい快楽を。そう浅ましく願う自分を恥じつつも、満たされていない感情も存在した。

「ん……」

小さな寝息が聞こえ、隣のベッドで眠るテットをチラリと見た。

祖国の皆を取り戻すため、グランデル王国を復興するために、変わらぬ忠義と敬愛を向けてくれる存在。

何度も『その考え』は頭をよぎった。その度に何度も否定した。

幼き頃より傍にいてくれたからではない。

冒険者として、今後も旅をして行くからではない。

これから先の未来も、変わらず共にいて欲しい。そんな小さな理由じゃない。

テットが忠義を尽くす『マキナ・グランデル』であり続けるために。慈愛と潔白に溢れた、彼の理想とする『主』であり続ける必要があった。ただ、テットのために。

『それ』を頼めばきつと、苦渋し悩み抜いた末に、彼はこの火照りを鎮めてくれるだろう。

だがその時、これまでとこれからの関係は崩壊する。テットの主は、肉欲に任せて部下を誘うような淫売に成り下がる。そんな主君に、テットを仕え続けさせてしまう。それがたまらなく嫌だった。

「……テットさん……」

ベッドの脇に立ち、月光に照らされる黒髪を撫でる。

私の騎士。私だけの従僕。

『王女』としての尊厳を失うわけにはいかない。少なくとも、彼の目の前では。

故に今宵は。今晚だけは。

ただの『冒険者』として。十代の若さでも身体一つで生き抜き、酸いも甘いも嘔み分けるであろう『魔法使い』として。

今はただの『マキナ』でしかないという想いを秘めて。

薄手の寝間着のまま、静かに部屋を出た。

\*\*\*\*

誰もが寝静まった時刻。宿屋の階段を一階へと、音を立てず下りて行く。

だが自分でも聞こえるほど、心臓の音だけが響いていた。呼吸する度に胸の奥が苦しくなる。

背徳感と恐怖感がせめぎ合い、今一体自分がどんな表情をしているのか分からなかった。

それでも、やはりこんなことはダメだと、頭の中の冷静な部分が訴えている。

同時に、もう自分を抑えきれないという、下腹部の熱が足を動かしてもいた。

「……だ、誰もいなくなったら、部屋に戻る……！」

小さく呟く。それは自分に向けての確認。

もしも誰とも出会わなければ、そのまま帰って朝まで寝る。そうしよう。それが一番。

——でももし、誰かいたら……？——

深夜にこんな薄着で、一人で出歩く自分を男が——『紋』の作用で自分でも乱れていると分かる女を、見過ごすだろうか。逃げられるものなのか。

「——誰だい？」

「っ！」

びっくり、と。肩が跳ね上がる。

そして自分の中で、『期待』が熟したことが告げられた。声が出た方を恐る恐る見る。

そこにいたのは、脂肪の詰まった腹が突き出て、頭頂部は薄くなつてきている中年男——宿屋の店主が、テーブルで一人、酒を飲んでいた。

「おや、マキナちゃんじゃないか！ どうしたんだい、こんな夜更けに！」

「あ、えと、そのっ……。お、お水を買いに……！」

「そうだったのかい。今日は一段と蒸し暑いからねえ。あ、座って座って！ 俺が持つてくるから！」

「い、いえ！ そんな……！」

しかし好意を無<sup>む</sup>下<sup>げ</sup>にもできず、なし崩し的に、店長が晩酌をしていた席の対面に座った。

そして彼はすぐに水の入ったグラスを持って戻ると、自分と向かい合う形で腰を下ろした。

「しかしホント暑いね。お酒飲んでるだけでも、身体の奥から汗が噴き出てきちゃうよ」

「……いつもお一人で？」

「……いやあ。普段は飲まないんだけどね。売り物だし。

でも今日は常連の「ツケ」を許したら、アマンダにこつびどく怒られてね。しかもアイツ、旦那と子供が待っているからって片付けもそこそこ早く帰っちゃうしさあ。まったく、どっちが雇い主なんだか……」

「た、大変なんですわ……」

「……でも本当は、少し寂しいからかな」

「寂しい？」

「ほら、テット君とマキナちゃんは明日でこの町を出て行くんだらう？ 短い間だったけど、料金の滞納もしないし優しいし、良いお客さんだったからさ。年甲斐もなく感傷に浸って……。そんな時は、酒でも飲むのが一番なのさ」

「そうだったんですか……。わ、私も、皆さんには良くしていただいて……。！ 本当に嬉しかったですし、色々なことを学ばせて貰えました！」

「ホントにマキナちゃんが良い子だなあ」

屈託なく笑う店主に、つられて顔を綻ばせる。

この宿に来たのは数週間ほど前。ここを拠点として、ギルドからのクエストをこなしつつ、これから先の旅の資金を集めていた。

そして装備も路銀も整い、これから新たに旅立つ。

しかし世話になった人と別れるのは、やはり物悲しいも

の。テットも下戸げこでありながら、今夜は常連客達と酒を飲み交わすことで別れの挨拶としていた。

「……良かったら、マキナちゃんもどうだい？」

「えっ？」

「少しだけ！ 一杯だけで良いからさ、今日で最後だし」

「で、ですが……」

「独身男を慰めると思ってたさ、お水オウエもあるし、寝る前に一杯だけ！」

無理に酒を勧めてくる男は、いつもテットやアマンダが厄介払いしてくれていた。しかし今はどちらもない。

それに今日は特別な日。この店からも明日出て行く。ならばその好意を断るのは、かえって失礼に思えた。

「ね、良いでしょ？ 勿論お金は取らないしさあ」

そして何より。店主の必死さや、その視線に。

普段の衣装以上に胸元が大きく開いたネグリジェを、透けて見える胸の谷間を会話しながら凝視していたその劣情に、気付かないはずもなく。

下腹部は既に、我慢の限界を超えていた。

「じゃあ、一杯だけ……。い、いただきます……」

恐る恐る、ウイスキーの入ったグラスを受け取る。

そのお酒に口を付ける時、店主の口角が僅かに上がった

ことを、視界の端で捉えながら――。

全ての感情を飲み込むように、ごくりと喉を鳴らして身体の中に流し入れた。

\*\*\*\*\*

「ふう……つ。はあ……」

「大丈夫かい？ マキナちゃん」

グラスの中にはまだ、酒が半分ほど残っている。

しかし琥珀色の水面に映る小さな顔は蕩け、涙でも流すのではと思うほど瞳は潤んでいた。喉元から胸にかけての白い肌も、ほんのり赤く染まっている。

「お酒弱いのに、無理に飲ませちゃったね。ゴメンね。今日はもうお終いにしようか」

「は、い……」

そう言って立ち上がろうとするも、足がフラついた。

「あ、危な……！ マキナちゃん！」

咄嗟とつさに店主の伸ばした腕が、腰に巻かれる。

引き寄せられたおかげで、転倒することはなかった。

「んっ……。ありがとう、ございます……」

「っ……！」

アルコールが回り、蕩けたような顔を上げて礼を言うと、店主に上から覗き込まれるような形になる。

大きくはだけた胸元。しかし重力に逆らうように、その乳房は形を崩さない。そして何より、ピンク色の小さな突起が寝間着の薄い生地を押し上げ、両胸の先端から存在を主張している。

くびれた腰に太い腕を回す店主の顔は、その瞳には、いよいよ獲物を狙う獣の色に染まる。

「……部屋まで運んでもらっても、良いですか……？」

「……えっ？ あ、ああ！ 勿論さ！」

一瞬呆けたように。しかしマキナの「お願い」を理解すると、嬉々として。

店主は、所謂いわゆる「お姫様抱っこ」の形で担ぎ上げた。

「あっ……♥」

そうして二階への階段を上っていく。

自分は王女として、とんでもないことをしているのではないかと再び思った。冷静な部分が警鐘を鳴らしている。

人生初めてのお姫様抱っこ――いや。遠い昔に、テットにしてみらったことがある。

――おもくないですか？ テットさん――

——なんのこれしき！ 姫様はお軽いくらいです！——

庭で遊んでいて足を挫き、同じく子供であったテットに、  
医務室まで頑張って運んでもらった。大切な思い出だ。

なのに、それが今は。

「……私、お、重くないですか……？」

「大丈夫だよ、マキナちゃんはむしろ軽いくらいさあ」

安易にも酒を飲み、「姫」のままだったら決して会うこと  
ともなかった人間に、こうして運ばれている。

だがもう既に、後悔や自己否定の気持ちは小さかった。

店主の左手が両足を支えている。そして右手は胴体を抱  
え込むように持ち上げて——いる風にして。

「……っ……………ん……………♥」

その右手が自分の胸に触れていることに。言いようのな  
い興奮を感じていた。

揉んではない。ギリギリ触れてもいない。しかし歩く  
度に揺れる身体が、大きな乳房が。開かれた店主の右手に、  
何度も接触する。

「……………」

「は、あ……………♥」

互いに分かっているはずが、何も言わない。

もともと  
尤も、ここで追及しても意図しない事故であるとして、  
きつと平謝りするだけだろう。

だから言及しなかった。胸に触られる度に、呼応するよ  
うに下腹部が疼いていたとしても。無関係だと思わして。

そうして店主に運ばれるまま二階へと上がり。

テットとマキナが泊まる部屋へ——は、向かわず。その  
隣の、角部屋への扉が開かれた。

「ちよつと汚れてるけどゴメンね。まず汗を拭かないと」

そこは店主の部屋だった。宿屋の管理人室といったとこ  
ろか。

その私室には帳簿や古本が乱雑に積み上げられ、脱ぎつ  
ばなしの衣服や下着、ゴミが散らばり、全体的に中年男特  
有の汗と煙草の臭いが充満していた。

『ちよつと』どころの汚さではない部屋に運び込まれ、  
ベッドではない床敷きの薄い布団に身体を置かれる。

二階に上がってきた時点で、そのまま真つ直ぐマキナ達の  
部屋に運べば良かったのに。明らかに狙ってやっている。

ここで逃げることも可能だった。まだ足取りは不完全だ  
が、隣の部屋まで歩いては行ける。それに杖がなくとも、  
簡単な魔法で中年男くらい、無傷で制圧できる。

——しかし『それ』を選ばなかった。選べなかった。

「……悪いねマキナちゃん。タオル全部洗濯しちゃつてたみたいだ」

ガチャリ。部屋の扉が施錠される。

それを理解した瞬間。他者には見えない『淫紋』が、光り輝き出した。

「……っ！ あ……っ♥」

下腹部の刻印。子宮をかたどったような、刺青にしても卑猥で下品なデザイン。紫とピンクが混ざったような妖し気な色の光を放ち、子宮に、膣に、身体全体に『疼き』を走らせる。

触りたい。今すぐ指を挿入したい。滅茶苦茶にしたい。

「ああ、でもそのままにしておけないし……。身体を冷まさないとね……」

そんな渴望など知るはずもなく。淫紋も光も視認できない店主は、万年床に横たわる自分に覆い被さってきた。

「あ……っ♥」

ネグリジェのスカート部を掴まれ、上に持ち上げられる。ゆつくりと、果実の薄皮を剥ぐように。

しかし、たくし上げられた薄手の寝間着が『引っかかって』止まる。

両胸の先端部——痛いほど硬くなっている乳首で布がせ

き止められ、そのまま上へ上へと乳房が引っ張られる。

それでも店主の手は止まらず——せき止められていた乳房は、ついに決壊する。

「お……おおっ！」

「ひやっ……っ♥」

店主の咆哮ほうこうにも似た歓声の後に。

ばるんっ♥ とした音でも聞こえそうなほど、豊乳は躍動して元の位置に戻った。

その圧倒的質量。重量感と存在感を放つ双つの山に。店主は暫し見惚れていた。

「これがマキナちゃんの……！ 服の上から見ても分かっていたけど、こ、これほどとは……！！」

仰向けになっても形は崩れず、標高も高く。

山頂の桜色に至っては、店主に芸術的とも思わせるほどだった。

「マキナちゃん……！！ マキナちゃんっ……！！ ずっと、俺……！！」

「ぎや……っ！」

酔いの介抱や汗あせもん云々など、既にながぐり捨てたようだ。

男の理性を一撃で破壊する凶器を前にして、ついに店主は欲望を解放して襲い掛かってきた。

「あーんっ……。じゅるっ……！」

左胸を乱暴に掴まれ。右胸にはしゃぶりついてくる。

店主は淡く小さな乳首を口に含み、コリコリとした弾力を舌で味わい始めた。

「あっ♥ んくううう♥」

半ば霧掛かっていたような意識が、一気に鮮明になる。

胸を愛撫されただけで腰が僅かに浮き、ビクンビクンと快樂という電撃が背筋に走る。

「すご……！ 柔らか……」

「やつ♥ 待つ♥ 採まない、で……っ♥ んんんっ♥」

採みしだき。手の平を滑らせ。掴み、摘まみ、指の間で挟む。

実に種類豊富な手付きで左胸が蹂躪され、その度に足や腰をくねらせてしまう。

しかも困ったことに、愛撫はそれだけで終わらなかった。

赤子のように右胸に吸い付いておきながら、その舌使いはとても荒々しいものだった。そのギャップにまた喘ぐ。

「あっ……ん♥ だめえ、でっ……す、うん♥」

口先だけの抵抗など、乳首を歯で甘噛みされるだけで、嬌声へと変わってしまう。

「はあっ、はあ……！！ マキナちゃん……っ！！」

ひとしきり蹂躪すると店主は満足したのか、あるいは着苦しいのか、上下共に衣服を脱ぎ捨てた。

窓から差し込む月明かりに照らされる裸体。脂肪とムダ毛にまみれた怠惰な肉体。好む女性など存在しないだろう。

(こ、これが……テットさん以外の、男の人の身体……)

同室でテットの着替えを見てしまった時は、騎士として冒険者として鍛え上げられたテットの肉体に、頼もしさと男性的魅力を感じたものだ。

だが今この瞬間、目の前にあるのは全くの別物だった。

眼前のこの身体なんかに——いやこの肉体だからこそ。

努力とは無縁の身体に、今から自分の身を——十数年間、穢れを知らなかった肉体を捧げるかと思うと。

それはとても罪深く、そして何よりも、熱く心揺さぶる行いに思えた。

禁断であればあるほど、その果実は美味だという。

「ほら……マキナちゃんも脱いで……。俺も脱いだんだしさ……。公平に、ね……？」

平常時であれば疑問符を浮かべる台詞にも、もはや抗う気はなかった。

——私はこれから、犯される——

身を守る最後の一切れ——既にぐしょぐしょに濡れた下

着を脱がされる。

濡れているのは下着だけではない。愛撫されて発情した全身には大粒の汗が浮かび、肌もネグリジェも、薄い布団も水気を増している。

——私は、王女マキナ・グランデルは今日、汗とカビの臭いがする狭い部屋で、煙草の煙が染み付いた毛布の上で、宿屋の主に純潔を捧げます。投げ捨てます——

両足を大きく開く。毛の生えていない股を、誰にも見せたことのない秘部を開帳する。

そうすると、男を知らない、ぴっちりと閉じた割れ目が露わになる。滝のような愛液を垂らし、肉感的に盛り上がった形の良い秘貝が微かにヒクついている。

——ああ……終わった。終わったんですね、今……。ごめんなさい、テットさん……——

ごくりと喉を鳴らし。王女は今——『雌』へと墮ちた。

「おねだりしてみなよ、マキナちゃん……。気持ち良くして欲しいならさ……」

その命令に、逆らう理由は見つからなかった。

瞳の中に妖し気なハートマークを浮かべ、額に玉のような汗を浮かべながら、火照った『女』の表情で懇願する。

「つ……♥ お、お願いします……。私の……マキナのつ、

男性を知らない身体を……♥ 身体の中の、奥の奥までいっぱいいっぱい、気持ち良く、シテください♥」

それは一人の——いや一匹の雌へと生まれ変わる、洗礼にも近い懇願だった。

そして店主はその想いを受け止めた。

ムッチリとした汗ばむ太ももを掴み、己の右手で剛直を握りしめ、相手にも見えるよう、その肉棒を持ち上げた。

「——えっ？」

声を漏らした王女はその時。夢から覚めたような気持ちになった。

——大きい。大き過ぎる——

思えば今まで、男性器など熟視したことがなかった。そんな機会なんてあるはずもない。

それでも分かる。今、眼前にあるのは。店主の一本は。

もうじき自分のナカに入ってくるであろうそれは、血管が浮き出てガチガチに固まった肉棒は、鉛筆や豚の腸詰などは比較にならないほどの——凶悪なフォルムと太さ、そして長さを誇っていた。

「ふふふ……。娼館の子達にも評判でね……。『経験浅い子は指名禁止』なんて言われちゃったほどだよ」

「えっ、嘘、待っ……!!」



くちゆりと音を立て。互いの性器が触れ合う。

使い込まれて浅黒い肉棒と、一度も使用されたことのない、淡いピンク色の肉壺。雄臭い中年男の我慢汁と、発情した雌の香りを放つ十代王女の愛液が、触れて混ざり合う。

「でも大丈夫……！ お願ひ通り、絶対気持ち良くさせるから……！」

「ひっ……！！ いやっ、助け、テッ……！！」

肉棒を押し当てられ。逃げようとしても腰をガッチリ掴まれて。逃げられない。犯される。

そして。ぐつと腰に力が入ったのを感じ——侵入を許す。

くぶ、ずにゆうううう……っ♡

「ひ——っ」

誰の接触も許してこなかった膣内の肉が、その純潔が。

互いの粘膜と粘膜とが、愛液と我慢汁が今——混ざり合った。

「あああああーっ♡♡♡♡」

一突きで、肺の空気が全て押し出されたかと思つた。

そして押し込まれた肉棒によって処女膜は破れ、じんじんとした痛みと共に、赤い鮮血が肉棒と膣内を濡らす。

「ひぐっ♡ 嫌あ……っ♡ 抜いて、くださ……っ♡」

痛みはある。だがそれ以上に、淫紋がもたらす快楽の方が遥かに大きい。そんな初めての感触に困惑してしまう。

「夢みたいだ……！！ マキナちゃんの処女が貰えるだなんて！ 責任取って、しっかり孕ませてあげるよ……！！」

拒否する暇もなく。すぐに肉棒を膣口ギリギリまで引かれると、それだけで内臓全てが引き抜かれると感じた。

だがそれは、店主のカリ首が膣内の肉ヒダをゴリゴリと抉る感触によつて生み出される錯覚だった。

もはや自分の思考も、周りの景色も、音も臭いも正常に感じてはいなかった。

ただ感覚の全てが下腹部に集中し、身体全てが膣壁と子宮になつていた。ギチギチと肉棒を締め付け、認識する。

痛いはずなのに。嫌なはずなのに。全ての感情も感覚も淫紋に集まり、全て快楽に変わつて全身に放流される。

「凄いやマキナちゃん……！！ ああ……っ！ こんなに締めりが良い子は初めてだ！」

「あーっ♡ あーっ♡ ひいん♡」

容赦のないピストンに、人の言葉を忘れるほどだった。

ただ与えられる快楽を貪り、本能のままに動物的嬌声を上げるのみ。処女の身では演技を知らない。本物の嬌声。

ピストンされる度に表情は蕩けていき、口の端から涎を垂らして淫靡に喘ぐ。それしかできない。

こんな姿を見て、一体誰が自分を王女だと思うだろう。だが今の自分は間違いない、世界で一番幸福な時間を過ごしている女だとも感じていた。

「あつ♥ あう♥ んっ♥ うう♥ んあ♥ あひっ♥」  
リズムカルに互いの腰がぶつかり合う。

その度に大きな胸は上下に揺れる。水面に揺れる波紋のように。一突き毎に、体内に強烈な快楽が流れ込んでいるのを現すように。ぶるんっ♥ ばるっ♥ という音と共に。その規則正しく、それでいて妖艶な乳房の舞は、店主の目を楽しませていた。

そして正常位のまま腰は止めず、彼は前に屈んできた。揺れる胸を揉みほぐしながら、一定のリズムで肉棒を抜き差しする。

「ひいひいん♥ それっ、だめですううう♥♥」  
それでも店主は、声など聞こえていないかのように腰を振る。

乳首を舌でねぶられると、処女の膣がきゅつと締まる。ただでさえキツキツの膣内が、更に締まることで肉棒とピッタリ密着してしまふ。膣内の狭さ、肉ヒダの形状、そ

れら全てを店主の肉棒に伝えるかのように。

「ああ……っ！ マキナちゃんのおマ○コ、物欲しそうに離さないでいるよ……！ そんなに俺が気に入ったのかい……！」

気を良くしたのか、腰の動きは一層荒々しくなる。

煙草臭い舌で乳首を舐め回し。ペロリと脇を舐め、乳房全体にも舌を這わせ、蒸れている胸の谷間や下は念入りに舐められる。

唾液を這わせることでマーキングした気になるのか、店主は太ももの裏やスベスベの膝裏、ムッチリしたふくらはぎや足の指の間までも犬のようにペロペロと舐めてくる。

「ああ……っ！ 美味しいよマキナちゃん……♥ すごく良い香りと味だ……！ マキナちゃんの汗を集めて、お酒で割って飲み干したい……！」

「やああつ♥ んんん♥ ふああーっ♥♥♥」  
猟奇的な性癖暴露にすら、喘ぎ声で応えるだけ。

今や嫌悪感や恐怖心すらも全て、脳に届く頃には全て快楽物質へと変わっていた。

「良い？ 気持ち良いかい？ 気持ち良いよね？ マキナちゃん！」

「……いい……っ♥ ……はいいい♥♥♥ キモチイイれす

う……♥♥♥ あー♥♥♥ あんっ♥♥♥ もつとお♥♥♥♥♥♥♥  
つるキモチよく、してください、ひいひいん!?♥♥♥♥♥♥♥」  
両脇の下に腕を差し込まれ。より密着する形で、二人は  
交尾する。快楽を食する表情で、恋人のように見つめ合う。  
店主の胸板に乳房が押し潰され、行き場を失った柔らか  
な脂肪がむにゅうと表面積を広げる。

動く度に互いの乳首が擦れ合う。

店主の突き出た腹は引き締まったウエストに、凹凸ピツ  
タリはまるように触れ合う。

そしてこの時。淫らな王女は、ただのピツチな雌は、打  
ち付けてくる店主の腰に、自然と両足を回していた。これ  
では仮に店主が肉棒を引き抜きたくとも離れられない。

つまりそれは、性経験がないにもかかわらず、本能的に  
肉棒を、セックスの快楽を欲したということ。種付けする  
雄を逃がさず、確実に受精するため。理性ではなく原初的  
な部分で、店主の精液を欲していた。

「ねっ、マキナちゃん、舌出して……。キスしよ……!!  
チューしよ、ほら……♥♥」

脇の下に差し込まれた腕から伸びる両手が、小さな頭部  
を掴んで固定する。正面を見つめ合ったまま逃れられない。  
だが拒否しようなどと、考えも付かなかった。鼻息を感

じるほどの距離で、小さな口からピンク色の舌を伸ばす。

「あー……っ♥♥♥」

その瞬間。店主はエサを喰らう魚のように動き。

ピンク色の柔らかかな舌は、店主の口に吸い込まれた。

「んぶううう♥♥♥ んっ、じゅるるるっ……!!♥♥♥ はあ……

んあ……♥♥♥ ちゅ……♥♥♥ くちゅ♥♥♥ ぶあ♥♥♥ んぢゅ♥♥♥」

唾液と唾液を交換する。口内に侵入する煙草臭い舌に、  
蹂躪される。熱く肉厚な店主の舌と唾液を求めてしまう。

そして店主も、遥か年下の美少女とのディーブキスに、  
キスハメに膣内で肉棒を膨らませて腰を加速させる。

小さく甘く、ぼつてりと柔らかい極上のペロ。どんな酒  
よりも美味しく、酔いしれてしまう口内の唾液ジュース。

それらを堪能されながら、まるで菌形を調べるかのよう  
に、白く汚れない菌は舌先でなぞられてしまう。

「んっ♥♥♥ ぢゅべ♥♥♥ れる♥♥♥ れるっ♥♥♥ ぶぢゅるるる♥♥♥」  
覚悟を決めた娼婦ですら泣き出すであろう責めを、それ

でもマキナは享楽として全て受け入れていた。目を半開き  
にしながらも、蕩けた瞳でしつかりと見つめ合う。嫌悪感  
から来る涙ではなく気持ち良さによって、サファイアの瞳  
はまるで今の膣内と同じくらいドロドロに潤んでいた。

そして店主の腰を両足でホールドするだけでなく、太い



今はただ、フワフワとした浮遊感に、人生で初めて味わう多幸感とその余韻に身を任せるのみ。

この部屋に運ばれるまでは世間体や己の責務、テットへの後ろめたさなどで胸を痛めていた。

しかしいざ体験してみると、なんと素晴らしいものなのだろうか。

どんなに美味しい料理も、綺麗な服も、温かな寢床も——この『セックス』という行為がもたらす快楽と比べてみれば、どれも陳腐な贗作ニセモノに思えてしまった。

同時に、王女であるというだけで自分に秘匿していた者達への『憤り』も感じた。

——ズルい——  
どうして誰も、こんなに『イイコト』を今まで教えてくれないかったのか。

高貴な人間は、淫らなことへは軽々と手を染めない。生涯でたった一人と結ばれ、跡継ぎを残すためだけに数回交わり、それで終わってしまう人間もいる。自分もそうなるってしまう可能性の方が高かった。

だが今は違う。

王女のままで決して手に入らなかった知識を、何物にも代え難い経験を手に入れた。

「……ありがとう、ございました……！」

最低にして最高の初体験を終え、満足そうに微笑む。

きつとこれで暫くは『淫紋』の疼きも鎮まるだろう。根拠はないが、そう思えた。

「ふふ、コチラこそ。じゃあ……『続き』、しよっか」  
「えっ？」

無知な王女は耳を疑った。自分はもう、満たされたのに。あれだけ出して精おきながら、まだやるのか。性行為とは一回で終わりではないのか。

しかしそれを裏付けるように、店主の剛直は変わらぬ太さと長さを維持している。

中年男性の精力を、性欲を侮っていたことを、ようやく理解させられた。

「待つ、私、もう……！」

「初めて会った時から、ずっとこうしたかったんだ……！  
二回や三回程度で終わらせないよ……。朝まで気持ち良くしてあげるからね……！」

「待つて、くださ……！ やだっ、少し休ませ……！」  
もはや立ち上がることもできない足腰で、それでも距離

を取ろうとする。逃げようとする。  
上体を起こし、肘で支え、背中を向ける。そして目の前

の壁に——この薄い壁の向こうで眠っているテットに、助けを求めるかのように手を伸ばす。

ずるずると必死に這いつくばる。もう少し。もう少しで壁に手が届く。

「自分から誘っておいで、そんな理屈は通じないよ……！」

「ひ……っ！」

だが後僅かのところで、尻を掴まれた。そしてくびれた腰に太い腕を回され、ぐいと引かれてしまう。

遠のく壁。届かぬ手。アリジゴクに落ちた獲物のように、無力に捕まってしまった。

そして墮ちた先にあるのは——背後から膺を貫く、二度目の熱棒。<sup>ペニス</sup>

ずちゅんっ！

「ああー……っつっつ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

熱さと圧迫感に、一際大きな声で鳴く。それを合図に、店主はカクカクと腰を動かし始めた。

陰毛にまみれた腰と、安産型の桃尻がぶつかり合う。後背位で激しく抜き差しされると、そのペニスの形や長さまでハッキリと感じてしまうほどだった。

男の力強さで、細いくびれ——腰骨を固定されてしまえば、意思とは関係なしにピストンを受け入れるしかない。

「ああ、イイよマキナちゃん！ 最高の名器だよ……！」

「おぉ♥ はあっ♥ んぐう♥ ギゅううううう♥」

既に獣の鳴き声だった。今までに出したこともないような喘ぎ声が、絶えず漏れてしまう。

だがどうにも、獣が交尾するかのような恰好で犯されていると、母の痴態を思い出し——興奮が止まらなくなる。

「んああ♥ んんぐーっ♥ はーあ♥ いづ♥ 深い♥ ふがいですうう♥ らめっ♥ だめええ♥」

先程の射精で放たれた体液が潤滑剤の役割を果たし、部屋全体にぐちゅ♥ ぐちゅ♥ と卑猥な音を響かせる。

そんな音を聞きながら、汗ばんだ顔を煙草臭い毛布に沈める。鼻孔いっぱい広がる、むせるほどの加齢臭。

なまじ二度目であるせいで少しばかりの余裕が生まれ、臭いや音も敏感に察知してしまう。五感の全てが、興奮材料になってしまっていた。

「マキナちゃん……背中キレイだね……」

「ふああ♥」

玉のような汗が浮かぶ背を、一点の汚れもない雪原<sup>ゼン</sup>のような背中に、店主の舌が這う。

猫の毛づくろいを思わせる舌使いで舐め上げられ、金の長い後ろ髪を嗅がれ、耳裏を舐められた後に甘噛みされる。

「ひうつ♥ 耳はあ♥ 耳はりやめえ♥」

くすぐったさはゾクゾクとした快感に変わり、口を閉じる暇もなく卑猥な嬌声を上げ続ける。

そうして開きつばなしの口からは涎が毛布に滴り落ちる。店主の寢床に水滴を作るそれを見やると、自分の大きな胸がぶるんぶるんと激しく揺れているのも確認できた。

腰が尻に打ち付けられる度、尻肉はさざ波を起こし、二つの果実が前後に揺れる。仰向けではなく四つん這いになった今、胸は重力に従って最も大きな形状となっている。

「はあっ、ホント！ 十代のくせにデカ過ぎだろ……！」

後ろから伸びてきた手が、腰の動きと連動して揺れる乳房を揉みしだく。太い指が柔らかな巨乳に沈み込んでいく。まだ若いながら既に熟しきっているほどの果実を堪能され、思うがままに中年男の手の中で形を変えられてしまう。

更にぐりゅうと、太い指によって乳房を掴まれた。

「いいいいっ♥ ちぎゅびい、いじめにやいでええ♥」

痛いほど勃起した乳房をコリコリと愛でられる。

そうして後ろから責められる度に、乳房の先端が毛布の硬い毛をシュッシュと掠める。

そして躍動する両胸をより味わいたくなつたのか。店主の右腕が胸の下へ、左腕は胸の上の鎖骨辺りに回される。

太い上腕で胸の肉を寄せ集められ、行き場を失った脂肪が、はち切れそうになるほど突出する。

形の良かった胸は、このまま茄子や瓜のような形になってしまうのではと思うほど伸びた。

「ああっ、イクっ、またイク……！」

「ふううううう♥ ああーっ♥ つう♥」

背中の上で自分を組み敷き、種付け交尾を迫る獣が動きを速める。

しかしこの男の、この野獣の体重を、跳ね退けることなどできるはずもなく。

雄の遺伝子を受け入れるのは雌として当然とばかりに、膣ヒダはその全てで奉仕し、子宮口は開き、特濃中年精子を待ち望む。

そして一度深く腰を打ち付けられ、狙いを定めたと感じると、その注入口からは——ドクドクと、欲望のマグマが大量に流れ込んできた。

「っ……！！ おあ……ッ！！」

「あぁーっ……っ♥♥♥♥♥」

肉棒に浮かぶ血管内の血の流れも、精液の奔流も、精子一匹一匹の動きすら感じ取ってしまいそうだった。

そうして獣じみたセックスを終えると、店主はペニスを

引き抜く——こともなく。

繋がったまま『栓』をするように。一滴も溢させないと  
言わんばかりに。

中出しされ腰砕けになっている下腹部を支え、無理に立  
ち上がらせてきた。

「あ、はえ……?」

抵抗するどころかマトモな言語すら発せなくなっている  
状態で、店主に貫かれたまま立つ。

しかし既に全身の力が入らないので、目の前の壁に身体  
をもたれかかると、そのまま額を軽くぶつけてしまった。

「ホラ、見てマキナちゃん……。見えるかい……?」

「ん、ふえ……?」

壁に押し付けられる顔、胸、両手。本来なら視界に広がる  
のは茶色い壁だけで『見る』も何もない——はずだった。

「あ……」

しかしそこには。身体を預ける壁には、小さな『穴』が  
空いていた。

そしてその穴は隣室へと——即ち自分達が宿泊している、  
今はテットがベッドで一人寝ている部屋に通じていた。

「……テット、さ……」

名を呼ぼうとして。

それより先に、肉棒が膣壁をかき分け押し進んできた。

「あひいっ♥」

背面立位（むちバック）の状態で、再び挿入と引抜が開始される。射精  
された精液と愛液が潤滑油となり、より一層スムーズにピ  
ストンされていく。

二度目の射精を終えて尚、精力は衰えを見せなかった。

「その穴からずっと見守っていたんだ……。マキナちゃん  
の服や下着の種類も枚数も、全部知ってるよ……。一人で  
『する』のは、いつもテット君がお酒を飲んで寝た時だけ  
なんだよね……!」

「おっ♥ あへえ♥ はひい♥ んんん♥ ああーっつ  
♥」

そんな事実の告白など、既に届いていなかった。

今はただ貫かれながら、犯されながらも、テットの寝顔  
だけを見ていた。

ここで彼を呼べば、きつと起きてくる。助けられる。  
店主を斬り殺し、自分には優しい言葉をかけ、それでも  
忠義を尽くしてくれるだろう。

——今ならまだ、戻れるかもしれない。  
もしかすると。限りなく低い可能性でも。

「……ふいー……。流石にちょっと腰が疲れるね……」





「えっ……。あ…………？」

不意に。それまで猛然と腰を振っていた店主が動きを止め、肉棒を引き抜いた。

それまでの圧迫感がなくなり、壁に手を付いたまま、股からは黄ばんだ精液がポタポタと落ちてくる。

それは——『消失感』とも呼べるものだった。

「……………なん、で……………。止めちゃ……………」

「アレ？ 止めないで欲しかったの？」

「……………っ！」

狡猾な笑みを浮かべている。これは畏だ。駆け引きだ。

ただ女体を食い散らかすだけでなく、さんざん責め立てて少し馴染んだと思わせたところで、さっと引く。

ここで『続き』を催促すれば、それはただの『おねたり』。雌としての完全敗北宣言。理性が少しでも残されているのなら、自分はこのまま帰れば良い。

「……………で」

「んん？」

だからこそ、この手練れた策に屈してしまう。屈服してしまう。

——このまま『お終い』なんて、選べるはずがなかった。「……………抜かないで、ください……………」♥ 切なくて、寂しくて、

欲しいの……………♥ もっとたくさん、たくさんたくさん私と、

マキナとえっちしてください♥♥♥ お願います♥♥♥

自ら尻肉を掴み。秘貝をくばあと開き、肉をかき分け。

精液ザーメンと愛液マン汁にまみれたマ○コを見せ、安産型の美尻を左右にぷりぷり振って男を誘う。

淫汁の混ざった液体をマ○コからポタポタと垂らし、力

が入らず半開きになった口からピンク色の舌をだらりと見

せて。唾液を零しながら懇願するその表情は完全に墮ちき

つており、もはやセックス以外のことに興味のない、色狂

いの娼婦以下であり、種付けを求める雌犬の表情だった。

「……………仕方ない、なあっ！」

ずん！ と一息で挿し込まれ、三度目の性交となる。

「あっ♥♥ あひっ♥♥ きたああああ♥♥♥♥♥ あああああ

♥♥ これっ、しゅきいいいい♥♥♥♥♥」

薄い木の壁と、中年男の脂肪に挟まれながら。白く細や

かな肢体は、汗と雌のフェロモンを発する。

「彼氏のテット君には悪いけどね……………っ！ こんな極上の

身体、襲うなっっ一方が無理だっの！ ああああは、マ

キナちゃん！ マキナちゃんマキナちゃん……………」

「んんんんううう♥♥♥ ひやああああんっっ♥♥♥♥♥」

テットは『彼氏』ではない。小さな覗き穴の向こうで穩



自分の主——グランデル王国の騎士として敬愛している  
王女は既に、魔女帽を被っている段階だというのに。

「おはようございます、テットさん」

「姫様……！ おはようございます……いえ！ 大変申し訳  
ありません！ 寝坊など、騎士としてあるまじき……！」  
顔面蒼白になつて謝るも、マキナは特段気にしていない  
様子だった。

「もう、何度も言いますが『姫様』はやめてくださいって  
ば。それに冒険者なら、多少の不摂生も醜味の一つで  
は？」

悪戯つぼく笑つて済ませてしまふマキナの姿に、テット  
は猛省と共に尊敬の念を抱いた。

慈愛に満ち、どんな者にも分け隔てなく接する。彼女こ  
そが、小国ながら由緒正しき長い歴史のあるグランデル王  
国を引き継ぐに、相応しい人間だと感服するばかりだ。

「……姫様」

「ですから……」

「姫様。俺は必ずや、グランデル王国を——全てを、あの  
憎き魔導師から取り戻します」

床に片膝を突き、真剣な眼差しを向けてから。恭しく頭  
を垂れる。

最上位の敬服と忠義を示す所作で、テットは祖国復興の  
誓いを新たにする。

「旅はこれからが本番。冒険者としての身分を騙りながら  
も、姫様への忠誠は決して揺るがぬことを、申し上げたか  
つたのです」

昨日までは、やはりどこか自由な『旅人』としての思い  
が——緩みがあった。

しかしそれが本当ではない。国を取り戻し、巨悪を倒す  
のが本来の目的。険しき旅だ。

たとえ冒険者らしく振る舞おうと、他の者達とどれほど  
親密になろうと。

剣を振るい、全身全霊を捧げる理由は、たった一人のた  
め。その『芯』だけは、見失うわけにいかない。

「テットさん……」

そうしたテットの想いに応えるべく。マキナもまた真剣  
な表情を浮かべ、彼の頭部に右手の平を向ける。

「……我が騎士テット・クロム。その忠義を以て、祖国の  
魂に報いるよう。マキナ・グランデルの名において——貴  
方が誇り高き剣であり続けることを命じます。……これか  
らもうよろしくお願いしますね、テットさん」

「……御意！」



「こういう時はアレだよ。『ゆうべはお楽しみでしたね』  
ってやつだ!」

「ガハハ! とにかく、二人とも仲良くな! でもあんまりデカイ音出し過ぎんなよ!」

「? はあ……。勿論です?」

テットは疑問符を浮かべながら、男達の輪に揉まれる。別れを惜しみ、明るく送り出してくれているのは分かる。だがやけに生温かいというか、奇妙な気遣いをされていると感じた。

しかし心当たりもないので言葉そのままに受け取り、一人一人に丁寧に礼を言っただけで回っていた。

そしてマキナも、『世話』になった男に別れを告げる。

「……じゃあねマキナちゃん。もしまたこの町に寄ったら、今度もウチに泊まってよ」

「……どうでしょう。……お世話になりました……」

店主と軽い握手を交わし、他の者と挨拶するのと何ら変わらぬ口調、表情を作っただけでそう答える。

何事もなかったように。本来これくらいの距離感であったことを、<sup>店主</sup>相手やそれ以外の面々だけでなく、自分自身にも示すかの如く。

「……マキナちゃんっ」

しかし店主は少しばかり握力を強め。手をねっとり握りつつ、他の者達に気付かれないよう耳元で囁いた。

「……次もたくさんサービスしてあげるからね」

「っ……!」

その言葉に。恐怖と嫌悪感と共に。きゅんと子宮が疼く。この時間には発動しないはずの淫紋が、反応してしまっただよな気がした。

「……もうこの町には、訪れないと思います……」

そんな捨て台詞すら、店主はニヤニヤとした顔で受け止めるだけだった。

そうして、二人だけのやり取りを終え。

マキナとテットは人々に手を振りながら、新たなる旅路へと踏み出していった。

\*\*\*

宿屋を出て、町からも離れ。

祖国の仇である闇の魔法使いを追って、二人は平原の街道を進む。

まず目指すのはブリタニカ国の『王都』。人を探すのなら、最も多くの人や情報の集まる場所に行くのが定石。

しかしその道のりは長く、向かうところに障壁も多い。

「……！」

そうした苦難多き旅路を啓示するかのように、二人の眼前には早速『障害』が現れた。

「アレは……！」

平原を駆ける、緑色の体表をした小人達。

その手には各々武器を持ち、赤い眼光をギラつかせ、二人に向かつて進撃してくる。

「ゴブリンの群れか……！ まさか昨日の……!!」

テットは剣を抜き、前衛として位置取る。そしてマキナも杖を構える。

ゴブリンは人間と同じく社会性を持つ魔物であり、殺された仲間の死を悼み、仇の人間に憎しみを抱く。

彼らは、昨日マキナ達が倒したゴブリンの仲間なのだろう。復讐を果たすべく、一心不乱に迫ってくる。

「十……十五……いや二十はいるのか……！」

さしものテットも冷汗が浮かぶ。

五、六体なら囲まれても苦にならない。しかし何十体も個体に一齐に襲い掛かれると、無傷で捌ききる自信はなかった。

テットには剣、マキナには魔法の素養があるとはいえ、

たった二人であれほどの数は――。

「――『フローズンブラスト』」

その時。

テットの背後から、無数の氷の槍が飛んでいった。

「グオオッ！」

「ガアッ!?」

「ギャアッ！」

次々と、ゴ布林達は氷の槍に貫かれて息絶えていく。

そうして平原には、雹でも降ったのかと思うほど氷の破片が広がり――ゴ布林達の死体と血によって、数秒前までの喧騒は静まり返った。

「これは……!!」

テットは驚いたように振り向く。

「あ、え……!! 私……！」

だがマキナの顔も、同じく驚きに目を見開いていた。

これだけ太い氷柱を、それもあれだけ大量に生成するなど、並大抵の技術では不可能だ。自分は未熟なのに。

実際昨日までは、これほどの難易度の魔法を行使する実力はなかった。

どうして急に新しい魔法を使えるようになったのか。心当たりは一つしかない。

昨日と今日で、違うこと。違う行動。今までしてこなかった経験。——初体験。

「ッ……!!」

しかしそんなことはあり得ないと脳内で否定する。もしも『それ』が本当なら、恐ろしいことになる。

「えと、あの……!! て、テットさ……!!」

「……お見事な魔法でした姫様！」

「……えっ?」

「いつの間にこれほど強力な魔法を……! あっ、いやいや。えーと……。マキナがそんなに努力しているなら、俺も負けられないな！」

「口調はこんな感じでよろしいですよね」とばかりに。それでも敬服と興奮冷めやらぬといった風に、テットはマキナの『修練』の成果を褒め称える。

「え、は、はい……。れ、練習して、いましたから……」

強力な魔法を扱うのに必要なのは、才能もあるが、何より地道な研究と鍛錬が求められる。

コツコツとした努力を積み重ね、その果てに我が主は今の魔法を使ったのだと、テットは常識的にそう判断して理

解していた。

誰しもがそう思うだろう。それ以外の答えには辿り着かない。

しかし真実を知るマキナだけは、この急激な技量と魔力の高まりを——それに至るであろう『方法』をどう受け止めるべきかと、下腹部を押しさえつつ顔を青ざめさせながら思案していた。



## Another End 1 30歳差の宿屋の花嫁

俺様の名は『放浪のジョー』。

あちこちで賞金首を倒したりトレジャーハントをしたり、実に真面目で健康的かつ、お手本のような冒険者だ。

しかし典型的な冒険者であるが故、今日もまたお約束通り路頭に迷っていた。

——町に着いたは良いが、泊まる宿がねえ。

ここから『火と水の町ウエルズ』までの旅費ならギリギリあるが、そもそもどこの宿屋も『空き』がなかった。

ドイツもコイツも考えることは同じか。『ウエルズ火山』で希少な鉱石が掘り当てられたからって、遠くの町からもこぞって冒険者達が押し寄せていやがるんだ。

一攫千金を狙う野郎共に安い宿屋は占領され、少し出遅れていた俺は結果的に、今晚泊まる場所にも窮しているというわけだ。

「クソ……っ！ 野宿だけは勘弁だぞ……！」

なるべくなら体力を温存した状態で火山地帯に入りたい。しかし現実には厳しく、どこの店先でも『満室御礼』の立て

板が俺を指差して嘲笑っていた。

最悪の状況も考え、苦渋の選択を迫られながら歩き回っている——。

「……お？」

ふと見つけた宿には、まだ空き部屋があるようだった。

しかし外観は立派であり、冒険者向けの安宿<sup>INN</sup>というよりは、中流以上の観光客を泊めるような宿泊施設<sup>HOTEL</sup>に見えた。

「……だが仕方ねえ！」

値は張るだろうが、背に腹は替えられない。

意を決し、綺麗な白塗りの扉を開いて、その宿へと足を踏み入れた。

「いらつしゃいませー！」

鈴を転がすような声色が届いてくる。

いざ入ってみると、まず外観との『ギャップ』に驚いた。宿屋の一階は広く、ロビーに椅子やテーブル、バーカウンターなんて洒落たものも設置してある。

しかしそこで談笑したり昼間から酒を呷っているのは、この小綺麗な宿に何とも似合わぬ荒くれ共だった。

そして二つ目の驚きが飛び込んでくる。

「お泊まりですか？ それともお食事を？」

ウエイトレスの恰好をした金髪のお嬢ちゃんが俺に明るく話しかけてくる。

その弾けるような笑顔と、制服の胸元から大きく突き出した二つの膨らみに見惚れた俺は、一瞬返答が遅れた。

「……あつ、え、えと。男一人の宿泊で」

「かしこまりました！ それではアチラの受付へどうぞ」

滑らかそうな細い手で指し示し、ウェイトレスはそのままテーブル客へ注文を取りに行った。

振り向いた瞬間にふわりとスカートが舞い上がり、一点の汚れもない美しい太ももがチラリと見えた。

「……この店は『アタリ』だな」

動揺を隠すように、口笛を吹いてニヒルに笑う。ここ最近の長旅で禁欲生活だった俺様こと放浪のジョーとしては、危うく正気を失うところだった。

お嬢ちゃんが歩く度に、僅かに揺れるデッケエ胸や尻を見て、『この場で押し倒す』という発想が脳裏をよぎったほどのだから。危ない危ない。

まさに『全身凶器』とも呼べる女体カラスへの劣情を、ぐっと抑えて。受付カウンターに座るハゲデブのオッサンのもとへ向かい、今夜泊まる部屋を取った。

一泊で安宿三日分の値段をふっかけてきやがったので償ってはみたが、繁盛している宿のオッサンは足元を見てくる。

他に行くアテもない。それに火山で一発当てれば回収できる金だと、俺は断腸の思いでこの宿に決めた。

「ふう……」

すっかり軽くなってしまった財布ちゃんを懐ふところにしまい、空いている椅子に座った。

そうすると近くにいた酔っ払い共が、他所ヨソから来た俺に馴れ馴れしく話しかけてきた。

「よう兄ちゃん。アンタもウエルズ火山行きかい」

「ああ、そんなところだ」

「しかし『アタリ』だったね。この宿に来て、あそこの部屋に泊まれるだなんて」

「あー？ ハズレの間違いだろ。他の部屋よりやたら高いし、角部屋ってわけでも日当たりが良さそうでもねえしよ」

「へへっ、まあじきに分かるって……」

「……？」

何やら生温かい顔でニヤニヤと見守られ、どうにも気色悪い。

しかしそんな生温かさや酒臭さを吹き飛ばすように、制服から良い匂いを立たせる金髪の嬢ちゃんが、俺の前にナツ入りの小皿と冷たい水を置いた。

「お泊まりいただきありがとうございます。お食事は如何いかに

なさいますか？」

「あつ、いや、俺は……。金……。ないんで……」

「そうでしたか。ですがコチラはサービスになっていきますので、どうぞごゆつくり。心行くまでお寛ぎくださいね」

近くで見ると、ますます暴力的な乳と美貌だ。

それにこんな綺麗な声と優しい笑顔で話しかけられたら、どんな男でも警戒を緩めてしまうだろう。

美少女ウエイレスが受付カウンターのの方に戻って行っても、俺はその可愛らしいぷりぷりとした尻を目で追いかけていた。

「へへっ、どうだい兄ちゃん。この宿の看板娘は、えれえ別嬪さんだろう？」

「ああ……。顔は可愛い系なのに、身体の方はまるで淫魔サキバスだな。あんなにエロい娘見たことねえ。……彼氏とかいるんだらうなあ……」

『彼氏』。何気なく呟いた最後の一言に、周りの男共は大声を上げて笑った。

なにがおかしいのかと、俺は水をチビチビ飲みながら訝しむ。

「彼氏なんてもんじゃねえ。マキナちゃんは、あそこに座ってる店主の嫁さんだよ」

「ぶふオっ！」

飲んでいた水を吹き出す。耳を疑った。

「この宿は夫婦で切り盛りしてるのさ。男の従業員も一人いるけどな」

「ともかく、驚きだろ？」

「三十歳差だもんな。あのハゲデブ店主がマキナちゃんと結婚するって聞いた時は、全員天地がひっくり返ったぜ」

「あのオヤジ、どんな手を使ったのか……。しかしマキナちゃんと結婚してから、宿を改築するほど稼いだしなあ。元から商才のある男だったのかも」

「……ま、マジか……」

三度目の衝撃。

視線を送れば、ウエイトレスの『マキナちゃん』とやらは、今は受付のオッサンと明るい笑顔で談笑している。

だが夫婦や恋人どころか、どれほど好意的に見繕っても親子にはか見えぬ。

しかもあんな美少女が。この宿の店主とはいえ、ハゲ散らかしたデブのオッサンに惚れて結婚するなんて。どう考えても、オッサンより良い男は他にたくさんいただろうに。

一晩で国民全員が結晶クリスタルに変えられた小国の噂を聞いたことがあつた。

だが今まさに目線の先にある光景カッパルは、それ以上に信じら

れない話だった。

\*\*\*\*

昼間の賑やかさは去り、多くの宿泊客が寝静まった夜。

剣士——いや今は『使用人』のテットは、湯を張った桶を手に抱え、宿屋の二階へと上がって行った。

明日も朝早くから仕事があるので早く寝たい。しかしまだ『業務』は終わっていないため、眠ることもできない。

そもそも最近では熟睡できていない。——マキナが、この宿屋に『嫁入り』してから。

主から「テットさんは自分の人生を生きてください」と言われた。それでも自分の意思で、住み込みの従業員として働くことにした。

たとえ、もう王女と騎士の関係ではなくなってしまったとしても、それでも彼女の幸せを支えるのが——それだけが、自分の存在意義なのだから。

そして。

二階の最も奥。角部屋の前に立ち、その『管理人室』の扉をノックした。

「旦那様、奥様。湯をお持ちしました。……失礼します」

ドアノブを回し素早く入室し、扉を閉めて施錠までする。そして、部屋の奥に視線を移すと——。

「——んんんんんん♥♥♥ アナタ♥ ああつ♥ ふふつ、ちゅぷ……♥ もっと、たくさんイジめて……?♥♥♥」

「相変わらず欲しがりなんだから……。まったく、仕方ないなあ……♥」

そこには。ダブルベッドの上で布団にも包まれず、月明かりに肌を晒す——二匹の獣がいた。

『つがい』の片方。雇用主にして『マキナの夫』である店主は、ベッドに仰向けになったまま、覆い被さってくるマキナと情熱的にディーブキスを交わしている。

そんな最中に入室してきたテットには、大して関心を示さなかった。

「……ああ、テット君。ご苦労様。すぐ終わるから、ちょっと待っててよ」

「……ハイ。かしこまりました、旦那様……」  
テットは扉のすぐ近くに桶を下ろし、部屋の隅に正座して待機する。

『こと』が終わった時、濡らしたタオルで二人の身体を洗い清めるのが仕事なのだから。

黒い瞳は高級なカーペットを見下ろしたままだが、その

耳や鼻孔には、嫌でもマキナの嬌声こせうと雌臭めいじうさが届いてくる。目を瞑つぶつても分かる。いや、目を閉じたらよりハッキリと伝わってくる。いつも傍そばにいたのだから。彼女の匂いも声も、十年以上の付き合いで覚えている。

それが今は、手の届かぬ範囲にあるだけで。

「よを見しないでください、アナタ♥ んちゅ♥ ちゅば……っ♥」

「おお、ごめんごめん」

マキナは仰向けになる店主の上に寝そべり、うつ伏せで激しく口付けを交わしていく。

その表情は昼間、客達に向けていたような優しい笑みではなかった。だらしなく舌を伸ばし、煙草臭い唾液を求め、発情した淫よこしまらな『雌』の表情になっていた。

「しかし今日はズイブン積極せきごく的だねマキナちゃん……。お客さんにいやらしい目で見られて、興奮しちやった？ 他の男に抱かれるの想像して、濡ぬらしちやっってたんでしょ？」

「んうん♥ そんなまさか♥ 私はアナタのお嫁さんですよ♥ そんなイジワル言いつちやうおクチは、こうです♥」

また自ら唇を触れ合わせ、綺麗なピンクの舌を動かし、互いの唾液を交換する。

そして下腹部へと手を伸ばし、腹に当たっていた肉棒に

触り、その亀頭を撫で回し始めた。

全ては愛する『夫』のために。それが妻として当然の行いだとばかりに、中年男に愛情を注ぐ。

それから夫の寝る横に移ると、そのハゲた頭をそっと抱え込むようにして、両胸を押し当てた。

「……ほーら、アナタの大好きなおっぱいですよー♥ 今日もいっぱい、ちゅばチュパしまししょうね……♥」

胸に着けている白いブラジャーは、レース素材の薄く透けた布生地だった。

豊満な胸を包むには頼りなく、しかし最大の特徴は、乳首のところ縦一線のスリット切れ込みが入っているとところだった。

何とか胸は隠せても、乳首は指で簡単に引っ張り出すことができ構造。

そんな下着ブラジャーへ店主は舌を伸ばし、スリットから覗く桜色の乳首を、ほじくり出して夢中で吸い始めた。

「ふぁ♥ んん♥ ふふっ♥ やんっ♥ あっ♥ もう……♥ 大人なのに、赤ちゃんみたいなんですから……♥」

「マキナちゃん……。マキナちゃん……。っ！ おっぱい美味しいよ……。それにもうじきママになるんだし、良いじゃないか……」

「アナタもパパになるんですから、しっかりしてください

ね」

今はまだ目立たないが、マキナの腹は日々、少しずつ膨らんできていた。

肥満体の店主と比較してしまえばどちらが妊婦か分からないような体型だが、それでも——マキナは今、愛する亭主の子供を身籠もっている。

しかし店主は「自分の子供にすら譲らない」といった風にな、スリットの隙間から見える乳首を熱心にしゃぶる。

その度にマキナは嬌声を上げ、しかし母乳は出ないが代わりに溢れる母性で、自分の父親よりも年上の男に『お乳』を吸わせる。

「……はあつ、はあ……」

「……ん？ はは、そろそろだね……」

「は、はい……♡」

授乳プレイをしていた夫婦は『第三者』の息遣いを感じ、一旦離れてベッドから起き上がった。

その荒い呼吸はテットのものではなかった。むしろ彼は、息を殺し存在を極限まで消し去り、今にも自決しそうなほどの『苦しみ』を浮かべながらも正座しているだけだ。

「ッ……」

声を上げず、身じろぎもせず。敬愛するマキナの痴態に、嫌でも反応してしまう『下』を憎く思いながら。

黒い瞳を閉じればマキナの発情した匂い、聞いたことなかった卑猥な声や言葉に、愚息が膨らんできてしまう。いつそのこと、主人に性的な反応を示してしまうこの肉棒を斬り落としてしまいたかった。そんな苦しみの中にいた。

「どれ、サービスしてあげようか……」

「ドキドキしちゃいますね、旦那様……♡」

だがテットのことなど、二人は気にも留めず。

部屋中央の椅子に店主が座り、更にその店主の上に座る形で、背中を向けたマキナが腰を下ろす。

しかしそれは単なる膝乗せではない。このまま腰を下ろせば、勃起した熱棒と濡れた愛壺が、合体する形になるのだから。

だが構うことなく、むしろ見せつけるかのように——両足を大きく開いたマキナは、ずぶずぶと亭主のペニスを膣内に受け入れていった。

「……ああああああーっっっ♡♡♡」

椅子の上での背面座位。

店主は下から『妻』を貫きつつ、長い金髪の匂いを嗅ぎ、

上下に揺れる胸に片手を伸ばしてわし掴み、そして膨らみ始めた腹にも手を添えて撫でる。

二人の愛の結晶。三十歳年下の処女に中出しして、その卵子を特濃精子で支配した証。それを肉棒で突き上げる。

同時に、妊婦でありながらマキナも髪を振り乱して腰を振る。『壁』の方を向き、淫靡な笑みを浮かべ、より興奮した表情で。

「ほら……『彼』が見てるよ……。たしか『放浪のジョー』とかって名前で宿帳に書いていたかな……」

耳元で囁くと、きゅん♥ と膣内の締めまりが良くなる。

やはり『見られながら』のセックスは興奮するのだなど、店主は嬉しく感じた。

壁——この改築された宿で、豪勢になったこの管理人室において、一カ所だけその『壁』は不自然だった。

昔と同じ、古く汚れた木の壁のまま、隣の部屋に声や音が漏れるほど薄かった。

しかしこの壁は、そして『覗き穴』は、夫婦にとって思いつきの一品。

何より、角部屋の隣の部屋に泊まった客にとつても、「他の部屋より高い値段を出して良かった」と思わせる理由になるものだった。

「あーっ♥ あ♥ ん♥ あ♥ きゃう♥ ん♥ ふふ……♥」  
自分の処女膜を『旦那様』に捧げた部屋で、覗き穴を意識しつつ肢体をくねらせると、隣の部屋の息遣いは更に荒くなる。そして、シュッシュと『ナニか』を擦る音も。

それを認識すると、膣が肉棒を切なく締め付けてしまうのを、自分でも感じ取った。

「まったく……!! テット君やお客さんに見られながら犯されてるのに、感じちゃうなんて……!! 淫乱なお嫁さんだなあ!」

「ごめんなひやいい♥ えっちな新妻でっ♥ お客様に視姦されて、ひいん♥ お、おマ○コヌルヌルにするウェイトレスで♥ 申し訳ありませんっ♥ ああんっ♥ でもしゅき♥ 旦那様の中年精液で孕まされて、おチンポ大好きママになっちゃったのお♥ んほおおおおっ♥♥♥」

結婚してから教え込まれた淫語を口にする、店主は醜く笑い、壁向こうのオナニー音は速まり、テットの唇には血が滲むほど歯が食い込む。

目の前で、かつての主が犯されている。今も愛する幼馴染が、中年男の妻として淫らな声を上げている。肢体が揺れ、肉と肉のぶつりか合う音が、粘膜と粘膜の混ざり合う音がハッキリ聞こえてくる。

下腹部を、優しく撫で続けていた。

それでもテットは何もしない。ただ、痛いほどに股間を膨らませているだけだった。それ以外に何もできなかった。己の忠義や騎士道のために、マキナの『選択』を曲げさせることなど。

彼女<sup>マキナ</sup>はもう王女ではない。国のために無謀な旅を続けるより、好きになった男と所帯を持つのが、本人にとつても一番の幸せだろう。

誰に強制されるでもなく、自分の自由意志で恋をし、結婚し、普通の女の子としての暮らしを手に入れたのだ。

それを自分の忠義<sup>ゴ</sup>で邪魔することなど、テットにはできるはずもなかった。彼女の幸せを、誰よりも願うからこそ。

「ああッ……！ イクよ……！ マキナちゃん、マキナちゃん、マキナ……ッッ！」

「ふああっ♡ 旦那様っ♡ アナタあ♡ イクっ♡ いぎゆう♡ 私も、イツひやううううーっ♡♡♡」

そして店主は妊娠<sup>ママ</sup>マ〇コに白濁<sup>子宮</sup>を放ち、壁の向こうでは切なさど快楽の混じった声が漏れ、テットは微動だにせず唇から血を流していた。

三人の男がそれぞれ『果てる』中で。

全ての使命と責任から解放され、一人の女としての幸福を選んだマキナは——ただ蕩けた表情で、新しい命の宿る



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコビル  
TEL.03-3555-3431(販売) / FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、  
ホームページ上に転載することを禁止します。

本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。  
また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**